

全国結核予防婦人会だより

発行●公益社団法人全国結核予防婦人団体連絡協議会
〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町1-3-12 TEL 03-3292-9288

2019.11

No.127



健康の輪



編集●全国結核予防婦人団体連絡協議会事務局(結核予防会内) 題字●初代会長 廣瀬勝代

資金寄附者等感謝状贈呈式並びにお茶会

令和元年5月28日東京都新宿区のリーガロイヤルホテル東京において、結核予防事業資金として結核予防会に多額のご寄附をいただいた個人や団体の方々に、秋篠宮皇嗣妃殿下より感謝状が授与されました。また、記念撮影とお茶会が行われ、資金寄附者の方々となごやかなひとときを過ごされました。



結核研究所国際研修生との懇談会

秋篠宮皇嗣妃殿下は、令和元年7月8日赤坂東邸にて令和元年度「持続可能な開発目標（SDGs）達成に向けたユニバーサル・ヘルス・カバレッジ（UHC）時代における結核制圧コース」の7カ国9名の研修生とご懇談され、研修生一人ひとりとお言葉を交わされました。



複十字シール運動表敬訪問

厚生労働大臣を表敬訪問

8月26日（月）、複十字シール運動開始にあたって、公益財団法人結核予防会の工藤翔二理事長と公益社団法人全国結核予防婦人団体連絡協議会の木下幸子会長が根本匠厚生労働大臣（当時）を表敬訪問いたしました。

日本は未だ中蔓延国を脱してお

らず、従来からの高齢者の結核とともに、とりわけ外国出生者結核への対応が重要であり、更なる努力が必要であることや複十字シール運動においては、婦人会の協力を得て、全国で結核予防の大切さ伝える活動を継続して行っていることをお伝えしました。

根本大臣からは結核予防の普及啓発活動への激励の言葉をいただき、最後に第70回結核予防全国大会で採択された決議宣言文に要望書を添えて理事長よりお渡ししました。🍷



複十字シール運動表敬訪問

知事表敬訪問

宮婦連健康を守る母の会
会長 大友 富子



で宮城県知事を表敬訪問しました。

令和最初の年の7月23日、宮城県結核予防会の渡辺彰理事長はじめ、宮婦連健康を守る母の会の総勢9人

当日は佐野副知事に昨年度の複十字シール運動の協力御礼と今年度の協力をお願いしました。

また、全結核罹患率について当県が全国で最も低い県でしたが、まだまだ地域格差が大きく近年は、グローバル化により外国の方の結核患者が今後も増えていくことが予想されることなどをご説明しました。

9月21日には複十字シール募金街頭キャンペーンを例年通り仙台駅前で繰り広げました。

結核はもう過去の病と思われているのかもしれませんが、1日も早い低蔓延国からの脱却を目指し、恐ろしい病だとわかってもらえるよう県民、市民の方々に啓蒙、普及を図っていきたくと思っています。🍷



群馬県地域婦人団体連合会
会長 関 マツ



今年も複十字シール運動が始まる8月1日、県結核予防婦人会会長、副会長、県健康づくり財団専務理事の6名で、知事の表敬訪問を行いました。県では知事の代理として健康福祉部長、同課長、保健予防課長、同医監が出席されました。

婦人会長より、結核を中心とした胸の病気をなくし健康で明るい社会をつくるため、その実現に向けて募金活動を行っていること挨拶し、複十字シール運動への理解と協力をお願いしました。

武藤健康福祉部長から現在の県として結核についての取り組みや現状などの説明をいただきました。群馬県では結核は減少傾向にあり、低蔓延県になったとのことでした。

続いて、武藤部長へ複十字シ-

ール運動の啓発用グッズを贈呈、それぞれの地域の取り組みや問題点について話し合いました。

特に、70歳以上の新登録患者が全体の50%以上であること、外国出生患者の増加、若年層の増加がみられるなど、まだまだ気を引き締めてこの運動に取り組んでいかなければならないと、思いを新たにしました。

最後に武藤部長を囲み記念写真を撮り、表敬を終わりました。🐱



岐阜県結核予防婦人部連合会
会長 竹中 昌子



7月25日(木)、結核予防会岐阜県支部の高木敏彦支部長とともに、この4月から就任された平木省副知事を表敬訪問しました。

県庁副知事室で、初めてお目にかかりご挨拶すると「男女共同参画社会づくり功労者内閣総理大臣表彰おめでとうございます。この表彰は大変素晴らしいですよ」と喜んでいただきました。そんな穏やかな雰囲気の中で知事表敬訪問が始まりました。

高木支部長から結核は今でも患者が発生しており、結核制圧に向けた取り組みや結核予防会の現状を報告し、今後に向けてのご理解・ご協力をお願いしました。

また、婦人会からは複十字シール運動の活動の一端をご報告しました。若いお母さんが、私たちにかけよってきて、「子どもの通っている学校の健診で、結核とわかって初めは驚きましたが、6カ月間薬をきちんとめば治ると言われ、最後まで治療を続けました。今は元気に学校へ通っています。本当にありがとうございました」とうれしそうに話しかけてくれました。また、笑顔で感謝の気持ちという募金してくれました。

このような素敵な出会いを経験すると、複十字シール運動の大切さや今後も頑張ろうと元気が出てきます。その気持ちは知事表敬に同行した副会長2名も一緒でしたので、婦人会の複十字シール運動への呼びかけに対する思いを知事にお伝えし、協力をお願いしました。

平木副知事は、地道に結核予防の大切さを伝える活動は重要であり、積極的に取り組んでいくよう、知事に伝えますと対応してくださいました。

この日の出来事を忘れず、結核のない健康社会の実現に向けて頑張っていこうと心新たにしました。🐱



徳島県結核予防婦人団体連合会
会長 藤田 育美



8月1日、複十字シール運動開始日に合せて、結核予防会徳島県支部の皆様と当団体役員で徳島県知事を表敬訪問し、複十字シール運動の意義や目的、そして取組みについて報告をし、広く県民にも普及を

図っていただけるよう要望を致しました。

また、9月2日には、「健康を考える県民のつどい」に参加し、会場で「複十字シール運動募金活動」を実施しました。会場には「よい歯の高齢者表彰」受賞者の方々、婦人会員や看護学生、一般の方など様々な年代の方が参加しており、学生には複十字ぼうやのカットパンとリーフレットの配布、高齢の方には、結核が決して過去の

ものではないことをお話ししながら募金活動をしました。

今後は、来年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて「結核の撲滅と受動喫煙の防止」について研修や周知に励み、ひとりでも多くの方に複十字シール運動の本質をご理解いただけるよう活動の輪を広げて参りたいと考えております。🐱



知事表敬（結核予防会徳島県支部と）



複十字シール運動募金活動で徳島県マスコットのすだちくんが応援に



長崎県結核予防婦人会
会長 西山 智子



結核や胸部疾患への関心を高め、健康で明るい社会をつくるための複十字シール運動が、今年も始まりました。8月1日に知事表敬訪問ができ、知事のお顔を見ることが

出来ました（長崎県では初めてのことです）。

この運動は、20世紀初頭デンマークで始まったとされ、複十字シールは現在世界80カ国以上で作成され活動が広がっていること、募金協力者に複十字シールを配り予防意識を高めていること等を紹介し、婦人会は『結核は昔の病気ではなく、日本の重大な感染症である』と伝え協力をお願いしました。

結核予防長崎県支部常務理事は「早期発見・早期治療が何より大切」と伝えられました。長崎県は、罹患率が全国ワースト10の中にも入っているのも、その原因は何かを究明し検討することにしました。

知事からは「行政も一緒に取り組まないといけない課題、予防を含めてしっかりやる」と力強い言葉を頂きました。🐱



知事表敬訪問（知事、福祉部長、支部常務理事、婦人会）

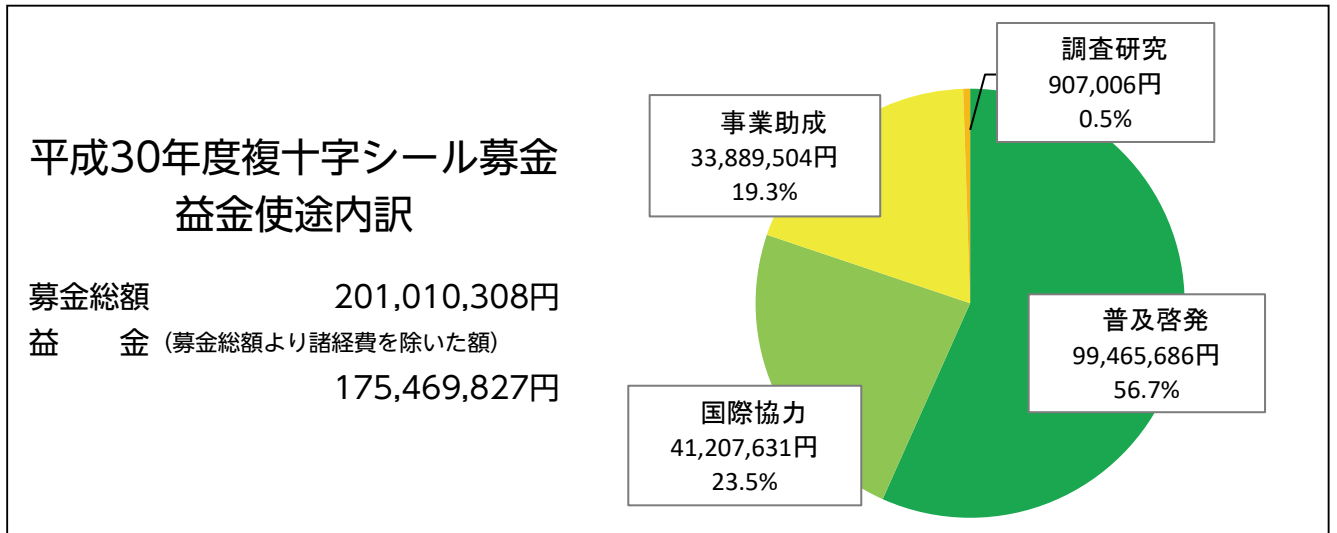
平成30年度複十字シール募金結果報告 で支援ありがとうございました

平成30年度の複十字シール運動は、厚生労働省、文部科学省、公益社団法人全国結核予防婦人団体連絡協議会の後援を得て、全国規模での募金活動を実施しました。募金総額は2億101万円、そのうち約3分の1にあたる6,179万円は婦人会活動を通していただきました。婦人会の皆様には、募金の呼びかけ、キャンペーンでの街頭募金活動、知事表敬による運動への

協力依頼等、多大なご協力をいただき心より感謝申し上げます。

諸経費を除いた募金（益金）は図の通り、結核予防の広報や教育資材の作成、研修会や結核予防全国大会の開催等の「普及啓発」、開発途上国の結核対策支援「国際協力」、全国の結核予防団体の活動支援「事業助成」、結核の「調査研究」等に使用させていただきました。

募金の方法には、郵送にて募金をお願いする方法や市町村等をお願いする方法等があります。その方法別の募金額では、5割を超す自治体で婦人会を通じた活動による募金が一位を占めました。婦人会の皆様の支援に重ねてお礼を申し上げますとともに、引き続き複十字シール運動へのご協力をよろしくお願いいたします。



結核予防会寄付型自販機 設置のご報告

飲料の売り上げの一部が、複十字シール募金となります。設置者様にはご協力いただきありがとうございます。

一部となりますが、紹介させていただきます。

- 財団法人山口県婦人教育文化会館様 (山口)
- 社会福祉法人長与町社会福祉協議会様 (長崎)
- 宮崎県地域婦人連絡協議会様 (宮崎)
- 社会福祉法人二丈福祉くらじの里家様 (福岡)
- 社会福祉法人二丈福祉会仙寿苑様 (福岡)

設置に関するお問い合わせ・お申し込みは、「特定非営利活動法人寄付型自動販売機普及協会」(フリーダイヤル：0120-937-650) までお願いいたします。🐱



長崎県長与町社会福祉協議会様



宮崎県地域婦人連絡協議会様

タイとフィンランドを訪問して

結核予防会総裁 秋篠宮紀子

タイのバンコクを訪れて

昨年12月、タイのバンコクで開催された「第11回母子手帳国際会議」に出席いたしました。アジア、中東、アフリカ、ヨーロッパなどの29の国と地域から447名が参加したこの国際会議のテーマは「持続可能な開発をめざす人生最初の1,000日間の奇跡—家庭にあるツールとしての母子手帳」でした。

タイは、1980年代から母子手帳の導入を始めた国です。この会議では、母子手帳の活用について参加者が情報を交換し、世界の妊産婦の健康と子どもたちの健やかな成長のために、母子手帳を今後さらに役立てていくための話し合いがおこなわれました。特に、妊娠から始まる1,000日の間に、母子手帳によって、健康に関する情報、正しいケアや適切な栄養について知ることができることが、大きな変化につながっていくことを認識する貴重な機会になりました。

会議の最後に採択された「バンコク宣言」では、最初の1,000日間に母親と子どもが適切な医療ケアを途切れることなく受けるために、母子手帳を家族で持つことが有効であることが強調されました。そして、各国政府やNGOなどが協力して母子手帳の普及を進め、母子の健康に関する知識を人々に広めるために手帳を活用するとともに、新しい技術を導入して誰にでも使いやすい仕組みに改良していこうという目標が示されました。

母と子が世界のどのような場所

に住もうと、どのような状況の下にありながらも、適切な継続的ケアを可能にする上で、母子手帳にはとても重要な役割があると思います。世界ではいまだに多くの人々が、自然災害や紛争、貧困の影響を受けています。また、多くの人々が結核やHIV/AIDS、マラリアなど、予防可能な感染症で苦しんでいます。障がいなどのために特別な支援を必要とする人々もいます。こうした中で、国連の持続可能な開発目標に掲げられた「誰ひとり取り残さない (No one left behind)」は、母子手帳に取り組むときに心に留めておくべき大事な言葉の一つと強く感じました。母子手帳が困難な状況にある母親と子どもの健康も守る大事なツールになることを願っております。

結核研究所の元国際研修生の方々との再会

バンコク滞在中に、タイで結核対策の仕事で活躍している三人の専門家にお会いしました。1990年代の日本の結核研究所における国際研修に参加した方々で、現在、タイの保健省で働いている方もいらっしゃいました。そのお一人は、昨年10月にオランダで開催された「肺の健康国際会議」でもお目にかかり、シンポジウムでタイの結核対策について発表されました。

タイにおいても、日本と同様に高齢化が進んでおり、高齢者の健康の問題についてもお話がありました。日本からの協力を得つつ、例えば、地域での高齢者の医療やリハビリテーション、さらに退院後の生活の支援を連携して円滑に

おこなうための仕組み作りなどが進んでいるそうです。

続いて、タイの結核対策についてお話を伺いました。タイの結核罹患率は、人口10万対153であり、日本の罹患率13.3の10倍以上です。国を挙げて結核対策を進め、罹患率は年々低下していますが、近年、都市部で厳しい生活を送る出稼ぎ労働者が結核を発病する事例が増えているとのことでした。また、治療を中断してしまう患者も多く、多剤耐性結核やHIVとの重複感染が大きな問題になっているようです。こうした課題を聞きつつ、今後も、それぞれの国で、積極的に結核予防活動をおこなっていくことの重要性を共有しました。

タイの王室と結核対策

また、タイの王室の方々が結核対策に関わってこられたお話を伺い、王室との関わりのあるお品と小冊子を受け取りました。

お品は、現国王陛下の祖父君であり、「タイ医学の父」として知られるソンクラーナカリン(マヒドン)殿下のお写真が掲げられた時計です。結核予防会を作るようにとおっしゃったお言葉も刻まれています。ソンクラーナカリン(マヒドン)殿下は、ご自身も結核に罹患されました。そして殿下は、人々を助けるために結核予防の組織を作るようにと大臣に伝えられ、それを受けて設立された結核予防会の総裁になられました。

いただきました小冊子は、プーミポンアダウンラヤデート前国王のご活動などを紹介するもので



ソクラーナカリン（マヒドン）殿下のお言葉が刻まれた時計

す。前国王も結核対策に熱心に取り組まれ、ご自身で作られた曲をタイの結核予防会の行事で演奏することをお許しになりました。結核治療薬やBCGワクチンを製造する設備のための寄付をされたことも記されています。



プーミボンアドウンラヤデート前国王陛下と結核予防会についての小冊子

この度のバンコクの訪問は、母子保健や結核対策の分野のみならず、高齢者の健康対策についても、タイと日本の関係者が協力していることを知る、貴重な機会になり

ました。

フィンランドの結核対策

今年には日本とフィンランドの外交関係樹立100周年にあたり、ご招待を受けて、7月に宮様とフィンランドを訪問しました。

その折に、結核対策の団体 Finnish Lung Health Association（通称Filha）で活動をされているお二人から、結核についてのお話を伺いました。



複十字があしらわれたFilhaのマーク

フィンランドでは、1907（明治40）年に結核対策のための団体 Tuberkuloosin Vastustamisyhdistys（結核対策協会）が設立されました。Filhaは、この結核対策協会を前身とする、フィンランドで保健対策に携わる最も古い団体の一つです。

結核対策協会は、1913（大正2）年から結核専門看護師の養成を始めました。そして、1940（昭和15）年からX線検診、BCG接種、結核専門医の研修をおこなうようになり、フィンランド国内の結核患者を減少させるために大きな役割を果たしてきました。1990年代からは近隣国であるロシアやエス

トニアの結核対策への協力など、国際的な活動が増えてきているようです。

1930年代には、1時間に1人が結核で亡くなるといわれたほど、結核の患者が多かったフィンランドですが、現在では、新規の結核患者は年間200人程度です。結核対策は、喘息のような呼吸器疾患への対策の一部となりましたが、少ない結核患者を確実に発見し、治療するために、一般の人々に対する啓発活動に加え、医師の結核に関する専門知識を維持するための活動が必要になっているということでした。

結核対策協会が設立100周年を迎えた2007（平成19）年に作られた小さな置物を記念にいただきました。円形が重なるこのしゃれたガラスの置物は、美術系の大学の公募で入賞した学生がデザインしたものと聞きました。



結核対策協会設立100周年記念品

今後、日本が結核の低蔓延国になる目標を達成した時の結核対策の在り方について、参考になるお話を伺うことができ、意義深いひとときをすごしました。

会長就任ご挨拶

愛知県地域婦人団体連絡協議会 会長 河野 ともえ



この度、愛知県地域婦人団体連絡協議会会長を仰せつかりました河野でございます。会長としての重責に身の縮む思いを抱きつつ、日々活動しています。

さる8月1日複十字シール運動初日に、愛知県地域婦人団体連絡協議会から会長・副会長、愛知県健康づくり振興事業団から理事長ならびに事業団関係者の方々と共に、愛知県副知事 青山 桂子 氏を表敬訪問し、理事長より複十字シール運動の趣旨説明をし、協力をお願いしてきました。また、私たちは機会あるごとに人々にこの運動の趣旨を繰り返し説明し、理解を深めて頂くことで、結核等胸部疾患の罹患率低減に繋がるのではないかと考え、行動しています。

今後におきましても皆様のお力を借りながら力足らずではありますが、全力を尽くしてまいります。ご指導、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

奈良県健康を守る婦人の会 会長 岡波 圭子



今年度より、奈良県健康を守る婦人会の会長という重責を受け賜わり、身も心も引き締まる思いであります。これからは、

色々と諸先輩方々のご意見やご指導を受け賜わりながら、前向きに進んでまいりたいと思います。特に奈良県としては、これからも結核予防に関する啓発及び普及に、力を入れていきたいと思っております。何分、一からの出発でございますので、皆様方のご指導、ご

鞭撻の程よろしく申し上げます。

島根県連合婦人会 会長 野々内 さとみ



今年度から島根県の代表になりました野々内です。よろしくご指導ください。

私たちは、島根県連合婦人会が、結核予防婦人会を兼務していますので、日々の婦人会活動と共に複十字シール運動や検診推進に努めています。

8月1日には、この春、就任された丸山達也県知事を表敬訪問し、複十字シールの歴史や活動内容について、島根県環境保健公社の水津副理事長と共にお話さいただき、温かいエールを頂きました。

長い歴史ある活動です。私たちは今後も地域住民・行政・医療従事者の皆さんと協力して結核予防への関心を高めたいと思っておりますのでよろしくお願い申し上げます。

高知県健康づくり婦人会連合会 会長 熊田 敬子



この度、高知県健康づくり婦人会連合会の会長に就任いたしました熊田でございます。

私たち、高知県健康づくり婦人会連合会は「健康づくりは幸せづくり」を合言葉に、高知県の目指す「日本一の健康長寿県構想」に沿った健康長寿社会の実現に向けて、特定健診やがん検診の受診勧奨活動や、生活習慣病予防のための啓発活動、そして複十字シール募金を「シール募金は健康募金」と位置づけ、結核や肺がん・COPDを含む胸部疾患に対する知識の啓

発と募金活動を幅広く展開しています。

折しも、「健康増進法の一部を改正する法律」の施行により、受動喫煙防止法が強化され健康に対する意識は益々高まっています。

こうした中、会員の高齢化が進む状況ではありますが、「健康に勝る幸せはない」ことを実感し、お互いに無理をしないで楽しみながら「健康づくり」活動ができるよう微力ではありますがお役に立ちたいと思います。

熊本県地域婦人会連絡協議会 会長 荒木 ミドリ



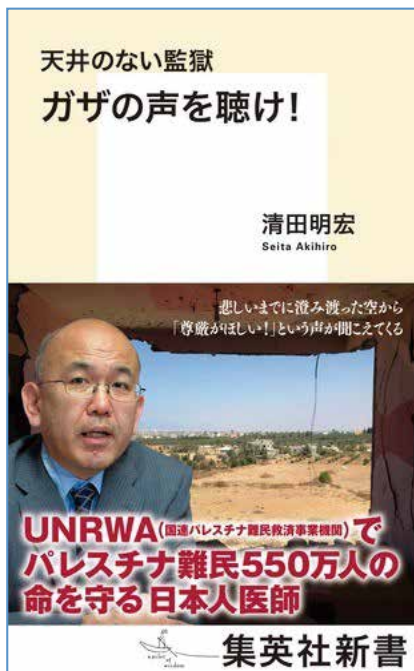
この度、棚橋前会長の突然のご逝去により会長に就任することとなり、責任の重大さに身の引き締まる思いです。

「結核は昔の病気だ」と思われている人が多い中、結核は現在でも多数の患者さんが発症し、亡くなっている感染症です。高齢者だけでなく若い方にも感染するという事を多くの人々に周知する為にも、複十字シール運動を通して結核予防啓発運動へ取り組んでいきます。家庭や地域の人たちの健康を守るため、地域に根ざした様々な活動を会員の皆さんの協力を得ながら広めていきたいと思っております。8月5日には、熊本県知事表敬訪問を行い、県や各市町村へも複十字シール運動への呼びかけとご協力をお願いしてきました。

結核予防についての正しい知識と検診の大切さをまずは会員の皆様にご理解いただき、結核予防の啓発運動の輪を広げたいと思っております。そのためにも、各県の会長の皆様のご指導を今後共よろしくお願いいたします。

清田 明宏医師が訴える「ガザの声」を聞いてください

結核予防会代表理事
石川 信克



結核予防会の元職員であり、25年にわたって、国際機関で活躍されている清田明宏医師が今年5月に「天井のない監獄 ガザの声を聴け！」(集英社新書)を出版されました。清田医師は、かつて筆者とともに、結核研究所の国際協力部を立ち上げた一人で、2015年に第18回秩父宮妃記念結核予防国際協力功労賞を受賞されています。

「ガザ」と言っても、馴染みがない地域かもしれません。東地中海の沿岸パレスチナ地域にある歴史的にも古い交通の町・ガザを含む地区で、東京23区の約6割程度の広さですが、本書は、国際政治の狭間の中で、そこに住む人々がどんな窮状に遭遇しているかを伝えています。

第2次大戦後、地中海の東岸に位置するパレスチナ地方にユダヤ人の国イスラエルが建国されたため、それ以前に住んでいた住民の多くは、難民化し、80万人もが難民キャンプでの生活を余儀なくさ

れました。その後、イスラエルとヨルダンに挟まれたヨルダン川西岸地区と、イスラエルとエジプトにはさまれ地中海に面するガザ地区にパレスチナ人による自治区が生まれました。それ以降、この地域は70年に渡り、世界経済や政治がうごめく一つの拠点として、550万人の人々が難民化しています。

その難民救済のために、国連によりパレスチナ難民救済事業機関(UNRWAウンルワ)が作られ、清田医師は、その保健局長としてアンマンを基地に現在活躍中ですが、現在、中東で活躍する数少ない日本人です。

自治区は、イスラエルによる封鎖や移動制限により、経済は大きな打撃を受けています。軍によるガザ侵攻やハマスによるガザ制圧による混乱など、軍事的、政治的混乱によって経済状況が極度に悪化しています。特に、ガザ地区では、住民は国境も容易に超えることができず、食糧や保健医療も限界の中で、「天井のない監獄」の状態に置かれています。

UNRWAはこれらの地域の住民のために、診療所の設置や食糧援助などを行っていますが、重なる戦禍や生活上の制限、就職もで



きない状況の中で、200万人を超える住民の8割が食料などの援助に依存し、失業率は40%以上で、生活状況は悲惨です。3000人以上の避難所となっていた学校がイスラエル軍より空爆され、多くの死傷者も出ました。

清田医師は、UNRWAの保健分野の責任者として、総合的ケアのための家庭医チーム、電子カルテや母子手帳の導入など、積極的な支援事業を展開して大きな成果を上げてきました。日本国政府も支援をしてきましたが、最大の支援国であった米国が資金の打ち切ることになり、医薬品の調達をはじめ、活動資金の調達にも苦労しています。

何よりも現地の状況を日本人の人々に伝えて、理解を得ようと本書が書かれました。本書には、数人の人々の生の声や子供の状況など、顔の見える紹介も多くあり、大変読みやすくなっています。また現地の子供たちが東北の津波の映像に流した涙や、日本の子供たちとの交流や風揚げなども紹介されています。多くの方々にぜひ読んでいただきたいと思います。

本書を通して、世界政治のはざまの中で、苦しんでいる人々の声を聴き深く理解し、そのために思いを馳せることは、貴重な国際貢献の一步でもあります。また本書の印税は、すべてUNRWAに寄付され、ガザのためにも使われます。ぜひ読んでください。🐱

コラム 生きがいについて

埼玉医科大学社会医学
教授 亀井美登里



はじめに

「生きがい」という言葉が今世界で広がっている。そのきっかけとなったのが、スペイン人のエクトル・ガルシアさん著書「Ikigai: The Japanese secret to a long and happy life」。ヨーロッパで出版したところ、スペインやフランスをはじめ、たちまちベストセラーになり、既に42か国で翻訳されているのだそうだ。

生きがいとは

生きがい研究の第一人者神谷美恵子先生によれば、生きがいということばの使い方には、次の二通りあるという。この子は私の生きがいです、などという場合のように生きがいの源泉、または対象となるものを指すときと、生きがいを感じている精神状態を意味するときと、この二つである。後者は「生きがい感」と呼び、区別している。さらに生きがい感と幸福感の違いも指摘している。生きがい感は幸福感の一種で、しかもその一番大きなものだという。生きがい感には幸福感の場合よりも一層はっきりと未来に向かう心の姿勢がある。たとえば、現在の生活を暗たんとしたものを感じても、将来に明るい希望なり目標なりがあれば、それに向かって歩んで行く道程として現在に生きがい感を感じられるのだという。さらに、人間がもっとも生きがいを感じるのは、自分のしたいこととやるべきことが一

致するときとも言っている。

サラリーマン

ところで、今の働く世代は生きがいがあるのだろうか。「サラリーマンの生活と生きがいに関する調査」(年金シニアプラン総合研究機構)によれば、最新の第6回(2016年度)調査結果では、「生きがいを持っている」と答えた人の割合が初めて5割を切ったという。第2回(1996年度)調査の78.4%から一貫して下がり続けた生きがいのある人の割合は、前回(2011年度)から一気に12.3ポイント低下、今回(2016年度)ついに43.6%となってしまった。要するに「会社員の二人に一人以上は生きがいがない」ということを示している。ゆとりの有無について聞いた設問も厳しい結果を示していて「時間的ゆとり」「経済的ゆとり」「精神的ゆとり」「友人・仲間」について、欠けていると評価する人の割合が軒並み前回より上昇している。また、1957年以降に生まれた世代は、団塊および団塊以前の世代に比べると生きがい保有率の水準が低いこともわかった。今回の結果から、仕事も家族も生きがいではないという難しい時代であるとともに、特に現役世代にとっては分かりやすい生きがいが見つけにくくなっているという状況が浮かび上がる。

健康と生きがい

「健康生きがい学会」の名誉会

長をされていた日野原重明先生は、かねてから生きがいの重要性を訴えておられた。生きがいがあるということは、日々の生活が充実し、達成感を持つということ。生きがいとは、特別、大上段に構えたようなものではなく、自分の身近なところでいくつも見つけることができる。人間は生きがいを持つことが大切であり、生きがいは人間を解放すると。

健康を実現できるかどうか生きがいが大きくかかわってくる。つまり、健康と生きがいは一体のものだということであり、これからの高齢社会における健康と生きがいは、ワンパッケージのものである。そして、仲間づくりこそが健康と生きがいの原点である。社会性のある生活を最後までおくるということがとても大切になってくる。

おわりに

現代社会は変化のスピードがとても速く、今日明日のことしか考えられなくなっている。Ikigaiの著者エクトル・ガルシアさんによれば、スペインに「生きがい」という言葉はなく、「生きがい」はすごく意味深い言葉なのだという。人生に、意義や満足感、幸福感をもたらすこと、それこそが「生きがい」であると書いている。今一度我々日本人こそ生きがいを見つめ直してもいいのかもしれない。🍷

カンボジアヘルスボランティアさんへ自転車を寄贈

令和元年9月6日（金）に、カンボジアのヘルスボランティアさんへ10台の自転車を寄贈しました。地域の患者さんのところへ出向くのに、自分たちで修理できる自転車を希望されていました。贈呈式では、多くの笑顔が見られました。

前かごには、「結核予防婦人会から、ピアレン地区へ寄贈」とクメール語と英語で書かれています。🐱



前カゴ拡大写真



左からピアレン医療圏郡結核担当官、ヘルスボランティア、ピアレン医療圏郡局長、同結核担当官とで記念撮影



10台の自転車を前に笑顔のヘルスボランティア



患者さんの
Quality of Lifeの向上が
テイジンの理念です。



ちふれ化粧品は・・・

「誰もが手に入れやすく、安心してつかえる化粧品を。」という思いを込めて創り出した私たちの化粧品です。



ちふれが、約束すること。

- **高品質・適正価格であること。**
製造や販売にかかる余分なコストを削減して、高品質を適正な価格でお届けします。
- **無香料・無着色であること。**
肌にやさしくありたい。だから、ちふれのスキンケアはすべて無香料・無着色です。
- **全成分・分量・配合目的を公開すること。**
品質の確かさや商品の安全性だけでなく、自分の肌に合った化粧品の内容を知っていただくためにも、すべての製品の全成分・分量とその配合目的を公開しています。
- **製造年月をすべての容器に表示すること。**
誰にもわかりやすく、安心して使えるように、製造記号を製造年月で表示しています。
- **環境問題に配慮すること。**
毎日使う化粧品だからこそ、環境を大切にしたい。ちふれは、詰替化粧品や植物由来容器の導入などで、環境問題に配慮しています。



ちふれ

あなたの、健康のそばに。



大正製薬



しあわせは、明日も健康であること。

人々の健康意識を高めること、日々の生活をOTC医薬品でサポートすること。
それが「セルフメディケーション」をスローガンに掲げる私たち大正製薬の使命。

OTC 医薬品のリーディングカンパニーとして、

より優れた医療用薬品の開発に力を入れるチャレンジャーとして、
常に「生活者の健康でより豊かな暮らし」の実現を目指しています。